

岩倉使節団における山田顕義

—渡正元との邂逅を手掛かりに—

発表者 大和大学政治経済学部 准教授
竹本知行

1 発表概要

今回、助成を頂いて研究したのは、山田顕義です。山田顕義は、いろいろな面を持っている人物です。日本大学や國學院大学の創始者として教育者の側面を持ち、初代司法大臣として様々な法律の制定に携わり、法典伯と言われ、また、戊辰戦争等においては、用兵の天才と言われ、さらには、松下村塾の門下生でもある人物です。

山田のいろいろな側面の中で、戦前から注目されながら、必ずしも研究が十分でなかったものがあります。それが、山田が明治6年に出している建白書です。山田は兵部省からの理事官として、明治4年から岩倉使節団に入っています。使節団の理事官は各省を代表して派遣されたもので、帰国後に理事官報告書を提出する事が義務付けられていました。山田の提出した理事官報告書は、本来、政府に提出されるもので市販されるものではありませんが、経緯は不明ですが、明治6年、「建白書」というタイトルで実際に発行され、多くの人目に留まるものとなっています。その内容は非常に先進的でした。山田の建白書は、吉野作造が手がけた「明治文化全集」の26巻「軍事編・交通編」の一番最初に取り上げられるなど、非常に先進的な論文であると戦前から注目をされていたものです。今日、山田に関する研究は日本大学で一番盛んに行われおり、当然、その研究の中にも建白書について言及されていますが、書誌的な意味等での分析に留まっている傾向があります。実際、中身を文字から見ていくことは重要なのですが、作成に至る経緯、思想的な背景、動機等について調べて、理解しておかないと、建白書の内容を正しく把握するのは難しいのではないかと考えていました。山田の理事官報告書は山田のヨーロッパでの体験を基に作成されたものですが、山田のヨーロッパにおける足跡は不明瞭でした。山田の日記等は発見されておりませんが、もしかしたら存在しない可能性もあります。そのため、山田の足跡については、岩倉使節団に副使として入っていた木戸孝允の日記の中で山田が登場する部分だけを見ていくということがこれまでなされてきました。木戸は詳細な日

記を書く人物で、買い物の品物まで全部書くような人物ですが、ヨーロッパにおいて、木戸はロンドンを拠点としていたのに対し、山田はパリを拠点としていたため、山田のヨーロッパでの詳細な足跡は分からないとされていました。

お亡くなりになりましたが、幕末期以降のヨーロッパへの日本人留学生について研究をされていた広島市立大学の田中隆二先生の業績でまだ未定稿だったものを奥様からいただき、確認したところ、一人の人物にたどり着きました。それが、論文のサブタイトルにもある渡正元という人物です。渡という人物は、当初私費留学でヨーロッパに行っていた広島出身の人物で、山田のパリにおけるガイド役を務めていました。渡の御子孫にお会いし、渡が詳細な日記をつけていたことが分かりました。ガイド役ですので、日記を見ると、山田の足跡が極めて詳細に分かりました。渡は山田より5歳程度年長の極めて優秀な人物で、フランスのサン・シール陸軍士官学校にアジア人として初めて正規入学しています。写真が残っており、配布資料に掲載している写真の中列の一番右で軍服を着ている人物が渡です。一人明けて3人目が山田です。二人は毎日会っており、渡が病気により同行できない日等を除いては基本的にずっと一緒にいます。渡と山田がどのような会話をしたかについて興味がありますが、日記の中に全てが出てくるわけではありません。渡がある程度まとまった考え方というのを残していないかと、調べてみました。渡は、普仏戦争の時にパリにおり、パリの籠城にも加わっており、自分の見たフランスの敗北の理由やプロイセンの勝利の理由等について「法普戦争誌略」に書いています。おそらくこの内容は山田に伝わっていると推測されます。また、それ以外の資料を探していると、岩倉全権大使がパリにいる際に建白書を提出しており、それを御子孫の方から提供を受けました。この建白書は、岩倉使節団に出したものですので、兵部省の理事官であった山田が見ないはずはありません。ですから、本研究では、渡の詳細な日記、法普戦争誌略、岩倉に対する建白書の3つの資料を基に山田の建白書がどのような形で形成されていったのかの論証を試みました。

山田の建白書は全部で8章の項目で構成されています。吉野作造の明治文化全集では、前編、後編という分け方がされていますが、原物ではそのような分け方はしておらず、1～8章まであります。1～7章が実際に山田がヨーロッパで見てきた内容、8章が視察を受けての持論の披露という構成になっています。その中にきわめて有名な部分があります。「兵ハ凶器ナリ」という軍隊認識です。「兵ハ凶器ナリ」という言葉は、尉繚子などの漢文からの引用です。山田は軍隊について、建白書において、「巨万ノ金額ヲ費シ人民ヲ勞シ少壯ノ事業ヲ妨ケ其学問ヲ礙シ」などと問題のある、コストのかかるもの

であるとしながら、抵抗の器としては重要であるとしています。これは国際法で考えられるところの自衛権に当たる考え方です。当時は自衛権という言葉はなく、自護の権などいろいろな言い方をされますが、主権国家がしのぎあっている国際社会の中において、軍隊は国家の存立のために必要である。様々なコストがかかり、リスクがあるものであるが、やはり必要であるという認識を示しています。この点は、他の明治の指導者たちと共有しているところですが、これまでにはなかった見識・論点も入っています。それは、ただ軍隊を創れば良いというのではなく、軍隊を創る前に、まず国家があって、そこに法が無ければならないということです。つまり、軍隊がいきなり国家を構成するのではなく、国家が先があって、それによって用いられる法という裏付けがあって、軍隊が創られるというものです。

これは明治初期に大村益次郎が建軍のプランを建てている頃の論と通底するものです。旧藩兵、旧征討軍を組織・編成しなおして軍隊をつくれれば良いという意見がある一方で、大村益次郎及びその最大の後継者である山田等は藩兵は一旦解体して、まず、政府があって、政府が、新たな法を作って、農兵を徴募して、軍隊をつくるべきであるというプランを持っていました。そういったものと通底する論点かと思えます。国家と法によって軍隊が組織されるという必要がある、さらには、国家があって、法があって軍隊があるという仕組みや理屈を一般の国民が理解していないと、徴兵しても意味がないということを言っています。これが、明治6年に出されたということは政治的インパクトを考えると非常に重要です。明治6年は徴兵令布告の年で、山縣有朋によって徴兵令が施行されつつある時に、山田は建白書で、人々が徴兵を受け入れるためには、彼らが国家・法・軍隊のあるべき関係性を理解しておくことが必須の条件だとしています。ですから、これは徴兵令延期論となります。そういう重要な政治的インパクトがあるのです。徴兵に先立つ教育によって法というものを理解していくべきであるとの主張は、山田の帰国後の人生と関係があるのではないかと見ています。山田が帰国した時には兵部省が山縣によって解体され、陸軍省と海軍省になっており、山田の居場所はありませんでした。その結果、山田は司法や教育の分野に入っていきます。それを考えると、建白書の内容は、山田の後半生を指し示すものにもなっていると思います。

そこで、このような建白書がどのようにできたかが重要な問題となります。これについては、渡の日記から分かってきます。関係するところを論文の中に転載していますので御覧ください。

明治5年4月24日の条にエーナン大尉という一人の外国人の名前が出てきます。当時の表記は様々であり、「英難」や「エーニャン」という表記も見

受けられ、木戸の日記の中では、山田と一緒に「エンヤン」という人物と会ったとあります。それらを突き合わせてみると、全部同一人物であろうと推測されます。彼は、日本人応接担当のフランス陸軍士官だったと思われます。この人物とどの位会っているかで、山田の調査の実施状況が分かると思いますが、山田は彼と非常に密に会っています。レクチャーが開始された明治5年5月からエーナンがスイスに調査旅行に行く7月末までの間に46回会っています。5月中に20回、エーナンが避暑旅行に出かけた6月で11回、7月にも15回と非常に頻繁に会っています。この際の通弁となったのが渡です。これを踏まえれば、彼の建白書に表れている軍事知識は付け焼刃ではなく、極めて綿密な調査の成果であると言えます。

なお、萩博物館にある先ほど紹介した集合写真については、これまでいつ撮ったものか不明でしたが、今回の調査の中で日にちとメンバーが、特定できました。7月16日の条に、皆で写真を撮ったという記述があり、メンバーも書いてあります。これについては、萩博物館の道迫学芸員が、私が編集委員をしている『軍事史学』という学術誌に檜崎頼三についての論文を書いています。まもなく出版されるのですが、その中で詳しく言及されますので、興味のある方は御覧ください。この写真の中の後列の一番左が檜崎です。白虎隊の生き残り飯沼貞吉を助け長州に連れて帰り養育した人物としても有名です。

このように日記を見ていくと山田が熱心に勉強している様子がうかがわれます。渡の言説については、先ほど申し上げた『法普戦争誌略』の中に、フランス軍敗北の理由として、「仁和を得ずして其軍を擅まゝにす。一失なり。」を第一に挙げています。つまり、戦においては、人間の気持ちの部分が非常に大きいということですが、その他にも「兵の勝敗固より人に在って而して兵器に非ざる」という言葉が出てきます。山田の建白書の中でも、同じことが書いてあり、「人民一般ノ知識敵兵ニ超越スルヲ以テ最要トス。」とあります。このあたりを見ていくと二人の考えに直結できる内容が多々あり、法普戦争誌略にある渡の言説が山田に少なからず影響を与えていると言えます。渡が明治6年の2月6日の日記に「今日特命全権大使岩倉公江上書ス」と記した上書の中身について、初公開のため参考に供したいということで、論文に全文を上げています。これも散逸していたのですが、御子孫によって発見され、そのコピーを頂いたものです。ここには、強い国家とそれを保証する軍隊をどうやって作っていくかについて、まずは「朝権ヲ固クスルに在リ」とあります。朝権とは、国の形、国体であるとし、この国是をきっちり作り、法律を作って、そして文武を維持し、官民を統御する必要があるとも述べられています。ここでも立憲主義的発想が出てきます。ただ、この立憲主

義や明治初期の法律等について、ドイツ法の真似であるなど、外国のコピーという言説もありますが、この時期において、国是というものを打ち立てることの必要性というのが強く述べられており、これが、山田の建白書の中にも同様に出てきます。それは、「伏願クハ、我朝固有ノ国体ト皇祖天壤無窮ヲ固守シ、国法ヲ定メ欧米諸国ノ国法ト我人民慣習ノ法とを斟酌シ・・・」というところです。このあたりは、渡の上書をより具体的に述べたものと言えると思います。

山田の欧州体験、渡との出会いが、山田の後半生に影響を与えます。山田は、初代司法大臣に就任し、様々な法律の起草に当たっていることは良く知られています。また、明治21年には皇典講究所の所長に就任し、国典の研究を通じて、日本の「国体」の明徴に熱心に取り組んでいます。また、明治22年には日本古来の法律と外国の法律を教育し、研究する機関としての、日本法律学校を皇典講究書内に設置しています。これが、のちの日本大学になります。さらに明治23年には、国学の研究や神職の養成を目的として、國學院大學の前身となる國學院を設置しています。このような業績を踏まえると、建白書において国体・国法・教育の確立を強く訴えていることは非常に重要であり、単なる理事官報告書として、また、政治的な意味だけをとらえるのではなく、山田自身の後半生を動機付けたものと見るができるのではないかと思います。本研究を踏まえ、今後、山田については、多角的な研究もなされていくと思います。ヨーロッパ滞在中の山田の足跡について、パリやドイツに滞在しているときの状況は分かりますが、渡が付いていないところがあります。スイスです。山田の建白書の中にスイスという言葉も出てきており、スイスでの見聞も彼に何らかの強い影響を与えたと予測されます。今後の課題として、これについての資料を別途探して、調査すれば、さらに立体的な研究が行えると思います。

2 質疑応答

(質問)

渡と山田の交流を通じて、山田の思想が完成されてきたと思うのですが、それぞれ随員と理事官という立場が異なる中で、どのように思想的交流が図られてきたのか、また、山田が渡に与えた影響について教えてください。

(回答)

岩倉使節団は、理事官が単独で行ったのではなく、事務官が付いています。兵部省に限らず、理事官クラスは概ね薩長出身の政府高官です。事務官というのは専門的知識を持っている人ですが、専門的知識を持った人というのは、

旧幕府に多くいました。この時に事務官が理事官をいじめたということが書いてあったりします。日本の中になれば、新政府の高官の方が立場が上ですが、実際にヨーロッパに行ってみると専門的知識を持っている人の方が立場が強かったりします。また、年齢も高かったりします。

留学生というと年少のイメージがありますが、渡の方が5歳程度年上であり、しかも渡はフランスのサンシール陸軍士官学校に行くほどの人物です。ですので、現地では渡が先生のような関係であったと推測されます。日記を見ていくと、二人は会うだけではなくて、一緒に遊びにも行っています。動物園、市場、観劇に行ったなどと記されています。また、深夜まで二人で酒を飲んで語り合ったなども記されており、そういうものを見ると、立場を超えた友情も十分にあったのではないかと思います。

一方、山田が渡に何か世話をしたかという点、渡が帰国してすぐに会いに行っているのは山田です。ですから、欧州の体験の中で、山田にお世話をしたし、お世話になっているという良い関係が出来上がったのかと思います。ただ、山田は山縣によって、陸軍省には入れてもらえませんでした。陸軍少将の位はのこりますが、兵部省がないので、兵部大丞という立場はもうないので。その中で、軍籍に残った渡に対するサポートがどこまでできたかという点、限界があったのかなと思います。